



## 金裕貞文学の翻訳Ⅴ : 「釜」、「妻」

朴, 鍾祐  
石塚, 由佳

---

**(Citation)**

海港都市研究, 18:41-68

**(Issue Date)**

2023-03-27

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/0100482804>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482804>



## 金裕貞文学の翻訳Ⅴ

### —「釜」、「妻」<sup>1</sup>—

朴鍾祐、石塚由佳

(PARK, Jong Woo) (ISHIZUKA, Yuka)

#### 1. 作品について

本稿は「山里の旅人」(1933年)、「チョンガーとカエル」(1933年)、「夕立ち」(1934年)、「ノダジ(富鉦脈)」(1935年)、「金採る豆畑」(1935年)、「餅」(1935年)、「ならず者」(1935年)、「炎天」(1937年)に続いて、五度目となる金裕貞作品翻訳の試みである。今回紹介する「釜」と「妻」はいずれも1935年、亡くなる2年前に発表された作品である。

一作品目の「釜」は、酒売りの女ケスギに入れ込んだクンシギが妻を捨てて女と逃げようと企むが、最後にはケスギはおろか、妻との幸福の象徴だった釜までも失ってしまう話である。この作品は『毎日申報』(1935.9.3~9.14)に総10回連載され、『毎日申報』美術担当記者である李承萬(号：杏仁)による挿絵が毎回添えられた。この挿絵は構図がクンシギ中心に偏っていることや文との不一致により否定的に評されもするが<sup>2</sup>、当時の生活ぶりを垣間見ることができる。そのため本稿では新聞連載回の番号と作品の後ろに載せた挿絵を照合できるように配置した。

二作品目の「妻」は、文芸雑誌『四海公論』12月号に掲載された作品である。器量の悪い妻を酒売りの女として働きに行かせるべく、懸命に唱歌を教える夫と、酒売りの女になるために家事や育児はそっちのけで練習に励む妻の物語である。

この二作品にはいずれも「酒売りの女」と「売春する妻」という金裕貞小説によく登場するモチーフ<sup>3</sup>が出てくる。そこで次項では、これらの問題の背景に迫ってみることとする。



(写真上「妻」表紙絵)

<sup>1</sup> 原題は「釜」(1935年連載当時の原題表記は「突」)、「안해」(全商國編『金裕貞 小説選集 山里の旅人』ヨニンM&B、2016年)。

<sup>2</sup> 金貞和「金裕貞新聞連載小説の挿絵研究」、金裕貞学会編『金裕貞の文学広場』ソミョン出版、2016年、pp.414~416。

<sup>3</sup> 「酒売りの女」は「山里の旅人」(金裕貞文学の翻訳Ⅰ)、「チョンガーとカエル」(金裕貞文学の翻訳Ⅱ)、「売春する妻」は「夕立ち」(金裕貞文学の翻訳Ⅲ)でも描かれた。

## 2. 「酒売りの女」と「売春する妻」

「酒売りの女」は当時の農村における売春風俗の現実を題材にしたものである。植民地下における 1930 年代の朝鮮の農村経済は産米増殖計画等の政策により破綻し、田畑を失った農民らの貧困は深刻化していた。職を失った農夫とともに現れたのが、「売春する妻」であった。

1930 年、肺結核を患っていた金裕貞(21 歳)は出席日数が足りず通っていた専門学校を除籍された。折悪しく 2 年にわたる片思いまで破れ、失意のまま故郷の春川シルレ村へ向かう。故郷の山里や貧しい村の人々は、感傷的な金裕貞の心を惹きつけ、癒した。彼は村に夜学を開き、村の人々と調和しようとした。中でも彼が最も愛したのは年上の酒売りの女たちであった。酒売りの女が登場する「釜」もまた、実話に近い物語の一つといわれる<sup>4</sup>。金裕貞が故郷に滞在していた期間は長くはなかったが、故郷の人々の姿、中でも「酒売りの女」たちは彼に強烈な印象を残した。1935 年の新聞で、金裕貞はこの酒売りの女を「朝鮮のジプシー(漂泊の民)」と称し、世の男たちに次のような言葉を投げかけている。

「妻を見せ物として開放する意思があるか、あるいはそれほどの勇気があるか、私は時々こう問いかけたい衝動に駆られる。もちろん社交界に受け入れるという意味ではない。自分の妻を大衆の見せ物として投げ出すことができるかということだ。(省略)この上なく大切な自分の妻を大衆に奉仕させることができるのかということだ。(省略)これはすべての仮面虚飾から逸脱した覚醒的な行動だ。妻を放り出して、そして食っていくのだ。愛嬌を売るということも最近になっては完全に労働化した。労働してこそ生活することに誰も異議はなかりう。これがすなわち酒売りの女だ。<sup>5</sup>」

金裕貞小説における夫たちは妻が酒売りの女になることを望み、容貌、歌唱力、愛嬌などが足りず酒売りの女になれない妻に落胆し、憤怒する。とんでもない話ではあるが、これが当時の農村の現実でもあった。金裕貞は困窮した農村において、夫が畑を耕し、妻が家事と育児を担うという従来の封建的秩序が崩壊し、売春する妻と、その妻を商品化する夫という新たな家族関係が形成されている現状を的確に捉えていたのである。この事実を踏まえると、本稿の一見滑稽な物語の背後に当時の農民たちの絶望を通り越した心境を垣

<sup>4</sup> 全商國編『金裕貞 小説選集 山里の旅人』ヨニソ M&B、2016 年、pp. 303~305。

<sup>5</sup> 「朝鮮のジプシー—酒売りの女の哲学(1)」『毎日申報』、1935 年 10 月 22 日一面から一部抜粋。

間見ることができよう。



写真左)「釜」の最後の場面のモニュメント 写真右)釜のモニュメント<sup>6</sup>

\*金裕貞文学に関しては韓国国内でも編集されたものが多数あるが、本稿では、金裕貞文学村村長を務める全商國編集の『金裕貞 小説選集 山里の旅人<sup>7</sup>』を底本とした。

### 3. 作品翻訳

#### 1) 「釜(釜)」

(1)持ち出せるものといっても、くり鉢<sup>8</sup>とぼろぼろの箕<sup>み</sup>があるだけだ。

その他にもふるいと椀<sup>わん</sup>がありはするが、割れて古びているので何の役にも立たないだろう。それでも、持ち出そうとすれば妻の目を盗まなければならないのに、向かい側にじつと座り込んでいるので身動きがとれない。

しかし今日も怒らせると、かっとなって自分からさっさと出て行ってしまおうのだろう…上座<sup>9</sup>のクンシギは夕飯の膳を下げた後、両脚を立て抱え、そして頭を垂れたまま黙っていた。なぜなら妙なきっかけがありそうなのに、ぱっと思いつかないためであった。

下座から降りて来る冷気で、焚口に近い上座までひどく冷たい。

秋ごろに屋根裏の天井に土を塗っておけば良かったのに、天井からは泥水がぼとりぼとりと落ち、冷たい風が漏れ入る。

<sup>6</sup> 江原道春川市にある「金裕貞文学村」では、金裕貞の生家をはじめとする多数の展示物があり、実際に小説の世界を味わえる。

<sup>7</sup> 全商國編、前掲書。

<sup>8</sup> 石臼の粉受け皿

<sup>9</sup> オンドルの焚口付近

ぼろぼろの古着を着て座り、幼い息子は火鉢の前でむずがる。

妻はその子どもをあやしなげながら、せつせとじゃがいもを焼いて食べさせる。しかし脚を横に伸ばし両手両足をよじる様は、一日中踏み臼を踏んで疲れ果てた身で、ひどくぐったりとしていた。手で時々口を塞ぎ、続けてあくびをするばかりだった。

しばらくしてから夫は顔を上げて妻の様子をうかがった。そして分厚い唇を歪めながら、すぐ不愛想に、

「さっき昼に誰が尋ねて来たんだ？」

と、一言素早く話しかけた。

しかし妻は、

「面書記<sup>10</sup>以外にはだれも訪ねて来てませんよ。」

と、大したことなさそうに答えて、目もくれない。

もちろん前から延ばしてもらっていた租税<sup>11</sup>を催促しに、面書記が今日来たことを夫も知らないわけではなかった。自分は街で先に気づいたため、捕まったらひどい目に遭うかとわざと避けた。けれども、どうせ話しかけたんだから、

「用があるんなら、俺を呼びつけるなりしろよ。なんでそいつを部屋に呼び入れて騒ぐんだ？」

と、目を剥かずにはいられなかった。

(2)妻はこの言葉に顔をぱっと上げると、にらんだまま向こうを向く。あまりに呆れ果ててものが言えない様子だった。不満げに顎<sup>あご</sup>を少し上げると、そのまま黙って子どもにじゃがいもばかり食べさせる。

この程度なら、と夫はもう一度、

「言いたいことがあれば外ですか、家の中にまで入らせるとは一体どういうつもりだ？」と怒りをあらわにした。ようやく、

「人の気も知らないで、いい加減にしてよ。あんたのために、口を塞ごうとして恥をかいていることは考えもせずに。」

妻は浅黒い顔に青筋を立てて怒ったが、しかし表情は怒ったまま戻らなかった。しばらくそうして座っていると、今度は夫の顔をまっすぐに見ながら、

「そうしないで、毎晩わらじでも編んで租税を持って行きなさいよ。」

と言って、しばらくしてから聞こえるか聞こえないくらいの独り言だ。

「女が好きだからって、そんなに家財道具を全部持って行くなんてさ！」

と、ちゃっかりとぶつぶつ言う。

「何だと、家財道具を誰が持って行くって？」

<sup>10</sup> 町役場の書記

<sup>11</sup> 春・秋に家毎に課した戸別税

彼はしらばくれて、平然と否定した。しかし内心では、杵<sup>きね</sup>で胸ぐらでも殴られたような感じだった。この時まで全然知らないとはばかり思っていたのに、妻は神業<sup>かみわざ</sup>のように以前から全部気付いている様子だ。昨晚妻の下着と一昨日の夜に石臼を盗み出したことがすっかりばれていたのかと思うと、不快なことこの上ない。

「誰がそんなこと言ってるんだ、殴られたいのか？」

彼はこう大声を出してみたものの、片腕で子どもを抱き寄せ乳を飲ませるばかり、若い妻は最初から相手にしなかった。

妻は妬みと怒りに耐えかね、何かきつい言葉が爆発しそうになっても、そのままぐっとこらえている様子だった。目は下に伏せ、はあはあと息をする音だけ出しながら夫が再び、

「誰がそんなことを言ってるんだ？」

と言う時になって、ようやく口を開いて言うことに、

「誰って？ ジェスクの母さんよ。」

「え、何だって？」

「酒売りの女と寝たっというじゃない。石臼とあたしの下着で、酒飲もうとしたんでしょ？」

夫はそれ以上ごまかせず、たちまち顔がかつと赤くなった。妻は生活しようと苦勞を顧みずにじたばたしているところに、夫という奴はその下着で酒を飲んでいたというなら、どこから見ても正しくない行いだ。彼は妻の視線を避けるほど、良心の呵責を感じた。しかしそうといって、自身の意志が折れるなら、同じく夫たる道理でもなかった。

「見もしないでいい加減なこと言いやがって、目がくらんだだと？」

と言い訳しようと、声を荒げた。

しかし何の効果もない上に、だんだん腹が立ってくるばかりだ。そのうち元も取れないとわかると、話をすばやく変え、

「お前は何だ、真っ昼間に男を部屋に呼び入れて、一体二人で何してたんだ！」

と妻を逆に咎<sup>とが</sup>めた。

妻は殺気<sup>きり</sup>が錐の先のようにふくれて、乳を飲ませていた子どもを床に放り投げ、ぱっと立ち上がった。自分の苦勞も知らずに不平ばかり言うので、とても恨めしい様子だ。冷たい部屋で寝てみるというように、平然とチマの帯紐を整えるとそのままさっさと出て行ってしまう。

子どもはまたそのままやかましく泣き続ける。

雪の上を踏む妻の足音が遠く聞こえなくなると、彼はようやくほっとした。扉を開け、静かに外に出た。何をしようとも、見ている人はいないだろう。

彼は台所に手探りで入って行き、まずマッチをシュッと擦り、きよろきよろと見回した。思った通りそのくり鉢は、かまどの上で主人をぼんやりと待っていた。その中に入れられ

たじゃがいもの切れ端はその場にぶちまけ、そうしてから、ぱっと手に持って裏庭の垣根へ出た。

前から持って出れば良いのだが、そうかと言って妻にばれるとひどい目にあう。困難でも裏庭の丘の上に登って、塀の外にどしんと飛び降りるしかない。

その次のこれがちょっとまずかった。しかしいつも通り家の裏でも見に、出て来たように後ろ手に組み、しおり戸の方へ出て悠々と辺りを見回せばそれまでだ。

白い雪の上には妻が今しがた踏んで行った足跡だけがまばらに残っていた。

彼は垣根に体をぴたりと寄りかけて後ろへ回り、その木の台をつかみ取るとすぐ逃げ出した。

クンシギは人家を避け、山のみもとへ離れて回った。しかしくり鉢は体にぴたりとくっつけてあるので、ばれる心配はないだろう。

陰しく冷やかな新月は、青い空に開いた目のようにぼつんと浮かんでいた。

スオリ谷を流れ落ちた小川も今は凍りつき、その光が鋭く光る。

そして山や野、家、稲むら、万物は幾重にも雪に閉ざされ、息の音さえ出さない。

山道を抜けて通りに出ようとする時、どこからか銅鑼がガンガンと鳴り響く。その音が静寂な夜の空気をほのかに揺らし、空の向こう側へ消える。

彼はぱたりと足を止め、ぼうっと我を忘れて立ち止まった。

今夜が農民会の総会であることを、うっかり忘れていたのだ。

(3)一度会に欠席すると罰金五銭だけでなく、無駄な役割まで負わされるのがこの村のしきたりだった。

またえらいことになったな、と道で彼はためらっていたが、具合が悪くて寝ていたと言えばそれまでだろう。こう安心してみたりもする。しかしどうしたことか、それでも気が咎めた。

この頃、吹雪が吹きつける中、粟飯を噛みながら新しい広い道を作るのはそう容易いことではなかった。震えながらそうしようとする、考えるだけでうんざりし、一層嫌気が差しそうになる。

では一日ゆっくり休んでそれをまたやるのか。会に行ってもすっかり忘れた話でも、うとうとしながら聞いて座っているのか……。

早くすっぱりと決められず、彼は通りで三、四回もためらっていた。

しかし、農民会が村の青年らをきれいさっぱりかき集めて行ったことだけは、有難いなんてものではなかった。今晚は酒屋に行き自分一人で酒売りの女を独り占めして遊べるだろう…。

彼はあっさりとかう考え、せつせと足を速めた。そして酒屋の近くに来た時には、嬉しいばかりではなく、勇気まで沸き上がった。

道端に離れてひっそりとたたずむ家が酒屋だ。山すそが隣に迫り、雪に覆われていてその痕跡がはっきりしないが、月明かりに照らされ細長い尾を垂らしている。西側に影が埋もれ、門が開かれ、そのわきに灯りが灯る一枚戸一つがある。

この部屋がつまり、ケスギが借りて酒を売っている部屋だ。

戸を開けてさっと入ると、ケスギは立ち上がって嬉しそうに迎え入れる。

「このくり鉢、どうしたの？」

その態度やうっすらとした笑みをつくる様は、四、五日前初めて挨拶した時と少しも変わらなかった。おそらく昨晚自分に向かって愛していると言ったその言葉が疑いなく本心であろう。いずれにせよ情とは、なるほど変なものだ—

「なんで笑うんだ。昨日の酒代に持ってきたのに。」

とクンシギは言いながら、どういうわけか少し照れくさかった。女が受け取って、こっちでござこそ、あっちでござこそしながら、あるいは床を叩いてみたりもしながらこんなに喜ぶのを見ると、

「これ、こう見えても二枚以上にはなるだろうよ……」

向き合ってにっこり笑ってやった。本当にケスギの楽しそうな顔を見るのが、彼の幸福のすべてだった。

女はくり鉢を持って内扉へ出ると、お膳一つを大事に持って入って来た。金がなくて申し訳ない気持ちから、くれとも言わなかった酒や酒代はどうなったのか、まずは一杯という意味合いだった。マッコリを火鉢で温めたものを注ぎ、

「さあ、召し上がってください。飲めば体がぬくもるでしょう。」

というと、手ずから口まで運んでくれる。

彼はあわてて一気にぐいっと飲み込んだ。そして一杯二杯三杯……

ケスギは嬉しそうに隣にくっついて座ると、クンシギの凍った手を胸にくっ付けてやりながら、

「まあ、冷たい、どうしたの！」

と言う。震えながら来たので、ずいぶん哀れな様子だった。

ケスギはとても気の毒がって、首をもたせ掛けながら、

「私、明日発ちます。」

と、離れがたい素振りを見せる。もう少ししようと思ったが、先ほど農民会の会長が訪ねて来た。村のために酒売りの女は絶対に受け入れないので、ただちに出ると言った。しかしこんな夜更けにどこに行こうか、明日の朝明るくなればすぐ出て行くと言ったというのだ。

この言葉を聞いて、クンシギは計画が崩れて呆然とした。いつかは行くとはわかっていたが、こんなにも急なこととは考えもしなかった。自分一人で離れればこれからはどうや

って生きろというのか—

(4)ケスギの話を聞いてみると、自分にも本来は夫がいたという。つまりオンドルの焚口に今寝ているあの子の父親になる人だ。酒ばかり飲んで博打に忙しく、妻をむやみに殴って稼いだわずかなお金を奪って行くので、到底耐えられず三か月前に別れたというのだ。

それでは自分と一緒に住んでも、差し支えないのではないか。しかしそんなことはとても言い出せなかった。

「そんなら俺はどうやって生きていけばいいんだ。俺も付いて行こうか？」

「それならそうしましょう—」

と、ケスギはその言葉を望んでいたかのようにあっさりと受け入れ、

「家にいる奥さんはどうするんです？」

「それは心配ない—」

クンシギは元気が出て、ここに来てやっとケスギを抱きしめて体を揺らした。妻くらい片付けるのはそう難しくないだろう。なぜならそのまま放っておきさえすれば、どこに行こうが行くまいが勝手にするだろうから。いずれにせよこれからはケスギに付いて行って暮らせるだろうと、ただ新たな生活が嬉しいばかりだ。

「明日明るくなる前に出て行けば、ばれないだろう—」

夜が更けても農民会のせいなのか、酒飲みたちはなかなか見えなかった。もう来ないのかと諦めて戸の鍵を掛けた後、灯りを消した。そしてケスギはぼんやりと座っているクンシギの腕に体を投げ出し、ふーっとため息をつく。

「家族で暮らすなら、せめてちょっとした家財道具ぐらいでもないかね—」

「心配するな。俺の家に行って、持って来るよ—」

彼は少しもためらわず、ただ受け入れた。なるほど妻が眠りこけていれば、こっそり入って、あれこれと気に入るままにこっそり持ち出せばそれで済むことだ。これからは飢えることもなく気楽に生きるのだと考えると眠気も差さないほどに胸が高鳴った。

部屋は隙間風がひどく強かった。店の主人があくどくて、オンドルに火もろくにくべない様子だ。ざらざらした空のかますの上に座って背中を付けて、怯えたようにぶるぶる震えた。

隅っこで寝転がされていた子どもが、にわかに関目を覚ました。むずがって間に割り込もうとするのを母親が叱ると、またもとの場所に行って声も出さずに横になった。大変よく慣らされた赤ん坊だった。

しかしクンシギは、そいつのことが考えれば考えるほどひどく嫌だった。俺たちが死に物狂いで蓄えたとしても、あいつが途中で使ってしまうだろう。自分の父親を手本に博打もし、母親を殴りつけ金も奪うことだろう。そうすれば俺は神仙暮らして斧の柄が腐るの

も知らないようなもので、せっかく大事にしてきたものが水の泡になりはしないかと考えると、今すぐに凍え死んでも惜しくはないだろう。

しかし、母親の機嫌を取ろうとして、

「こいつめ……良い子だな。」

と、二度その尻を優しく叩くしかなかろう。

月が傾き、一枚戸を薄明るく照らした。

時々牛小屋では牛の息づかいのふうふうという音が重なって聞こえてくる。

平和な寝床に思いがけず鬼が入って来た。ムンテが来て低い声でケスギを呼びながら戸を開けると騒いでいるではないか。前からケスギに金を使っていた常連だとやたらに堂々としている。

クンシギはくそ野郎め、と眉間に皺を寄せた。しかしケスギが耳打ちで、

「私ちょっと相手して帰すから、外に出て待っててください。」

というので、内心心強くないこともない。その言葉は夫を信頼して言う懇願であろう。彼は奥に通じる戸の方へ風のように出て、壁に体をびたりと付け、時々中の様子を覗き込んだ。酒屋の主人が出て来てこれを見たなら、ただちに頭がおかしいのかと罵るだろう。そうでなくても一昨日は、「あんた、最近だいぶ入れ込んでるね。俺は酒が売れるから良いけど、石臼なんて持って来て、奥さんとの生活はやめるつもりか？」

と、たしなめられた。今日ばればまたどう言い訳をするか—

(5)クンシギは震えて立っていたが、おかしな話を聞いてはっと我に返った。彼は戸に近づいて静かに耳を傾けた。

なぜならムンテが入って来ながら、

「今日もあいつ来たのか？」

というとなが、

「いいえ、誰も今日は来ませんでした。」

としらばけると、

「来ただろう。あいつまた浮気しやがって。」

と、生意気にあざ笑う。

ここであいつとかあの野郎というのは、尋ねるまでもなくクンシギを指す。彼はぶるぶると身震いした。

それだけでなく、しばらくの間あれこれとぶつぶつぶやくと、

「あいつ村から追い払われるぜ——！」

「なぜ、追い払われるの？」

「会には来ずに、酒屋にばかり行ってるからさ。」

(これは完全な嘘だ。会にちょっと行かなかったからって追い払われるはずはない、この

人でなしめ。)

と彼は内心怒りながら、密かに固く握られた拳がしきりに震えた。

それくらいなら良いものを、

「あいつどこまで馬鹿なのか、女房まで村のあちこちで馬鹿だと罵ってるんだ——」

(また嘘だ。女房は俺を怖がっているのに、そんなこと言えたもんか!)

「夫のことを馬鹿ですって?」

と女がほほと笑うと、

「じゃあ違うってのか? それからケスギのことを一族のならず者の泥棒女だと言ってたぜ。石臼も持って行って、下着も持って行ったって…」

「誰が持って行くですって。持って来てくれたからもらったのよ。」

と、女がとんでもないという様子だったので、

「俺が知るかよ、クンシギの女房がそう言ってるんだからそう言っただけだ。」

(妻がたとえそう言ったとしても、それを全部そそのかすなんて、この野郎!)

その次は努めて聞こうとしても聞こえないほどの小声で何とかかんとかしやべりまくる。彼は結局のところ、自分とケスギの仲が良いから嫉妬して仲を裂こうと考えたのだ。しかし女もふしだらにも始終受け答えしながら一緒に笑っているではないか。

クンシギは怒りを禁じ得ず、息の音も荒くなっていった。しかし、そうかと言って走り出て行ってぶん殴ってやる状況でもなく、どうするすべもない。ケスギでも何か言ってくれば腹立たしさも和らぐだろうが、それさえ一言<sup>けんつく</sup>剣突を食らわせてくれるでもなく、ぐるになったようで薄情なことこの上ない。

彼は怒りと寒苦によって手をこまねいたまま、ぶるぶると震えた。穴の開いた靴下なので、雪を踏んで立っていると骨の先までうずくように冷たい。

体が辛くなってくると、彼は妻の考えが頭にふと浮かんだ。家に帰りさえすれば暖かい懐が待っているだろうに、なぜこんな苦勞をするのかわからなくなった。

しかし再びよく考えれば、妻なんて嫌だった。アランー一曲歌えない馬鹿、金一文稼げない間抜け……確かに昔は世間知らずなほどに情が厚かったが、それは一体いつのことか。すっかりさびついてしまった。

多くの人の懐を渡り歩き、抱かれて得意になっている酒売りの女が、卑しいとは言われながらも大変な思いをせず食っていけるのがどれほど羨ましいだろう。よだれをだらだらと垂らしながら飛びつく奴らをこの手あの手で思い通りに操るのだから、そんな贅沢はまったく貴重だといえよう——

彼は厳しい寒さに、こうまくしたてるほどに体が凍り付いていく。しかし家に帰って寢床の上で楽に休む考えは少しもない様子だった。ただケスギが呼び入れてくれることだけを待ちこがれ、頬づえをつけて首を長くしているほどだ。

激しい吹雪は時折首筋にいきなり打ち付ける。

その度にチョゴリの掛け襟に雪が舞い込み背筋がぞくぞくした。

(6)クンシギがどんなに待っても、時間になっただろうに、呼び入れてくれない。ささやき声さえ消えて、今は野太い息の音だけが聞こえてくる。

彼は自分でも訳の分からない怒りが、頭の先から足先までぐっと込み上げた。酒売りの女とは汚いものだ。他人の暮らしをめちゃくちゃにしておいて、その上貧しい農夫の血を搾り取るキツネだ。と、非常にあっさりと考えた。一方で、そんなにまで怒って出て行ったのに妻の怒りが今頃は収まっただろうかという考えもしてみる。

軒先に積もった雪が暖められて地面に落ちる時、その時、間違いなく彼は家に帰ろうとした。もしケスギが折よく呼び入れさえしなかったなら、

「くそ、汚れた女め！」

内心、こう唾を吐いて、見てみろと言わんばかりに家にぱっと走って帰ったかもしれない。

女はある戸に向かって、

「寒いでしょう。早くお帰りになって。」

「なに、これしきの寒さ……」

「では気を付けて。またあとで会いましょう。」

「うん。また後で一度会いに行くよ。」

ムンテをこのように見送ると、また門の方に、

「静かに入って来てください。」

と、そうっとクンシギを引き入れる。

彼は足の裏の雪をはたくのも忘れて、ありがたがってすぐに入ると、まずは凍りついた手をこすり合わせた。

「外でずいぶん寒かったでしょう？」

「なに、このくらいの寒さなんて。」

と彼は満足げに笑いながら、あんなにも沸々としていたさっきの怒りは全部忘れてしまった。

「あいつ、人が寝てるのに、なんで来て邪魔するんだ……」

「本当だわ。気が利かない。」

と、女は少しも抜け目なく、相変わらず愛想を言った。そして油皿に火をつけながら、ほろ酔い機嫌でにこにここと笑う。

「あいつは平気で嘘ばかりつきやがるやつだ！」

と、クンシギはさっきムンテにされた仕返しをせずにはいられない。俺もお前がやったくらいにやってやろうと、

「あいつ片端かたわになったって聞いたのに、どうやって歩き回ってるんだ！」

「なぜ片端かたわになったの？」

「人の女と浮気したのがばれて、一晩中木枕でぶん殴られたんだ。それで尾骶骨びていこつが折れたとか、脚が折れたとか言ってたけど、ちゃんと歩いてるじゃないか！」

「あらまあ、おかしいこともあるものね！」

女は世の中にはそんなこともあるのかというように眉をしかめると、

「ちょっと女遊びしたくらいでそんなに殴られるなんて…」

「い、いや。そうすりゃ俺だってすぐさまあいつを…」

と、クンシギは自分の妻が辱められたかのように意気込んだが、しかし女は顔をしかめながら、

「その女の人、どこか頭おかしいんじゃないかしら？」

と、話を歪めて行くことには、仕方なく自分も、

「そりゃそうだ……その女がまったくひどいさ。」

と、素早くなだめるのが得策だった。

明日からでもケスギに付いて行って暮らすのに、あれこれ言っているのは粥すら食べさせてもらえない。それよりは体が裂けようとも、食べられさえすればそれまでではないか—

それはそうとして、いずれにせよムンテの野郎の悪口は言っておかねばならない。彼はタバコを一本吸いくわえ、ムンテはもともと金も信用も何もないごろつきだとか、村ではあいつの言うことは聞かないだとか、ひいては他人の家の麦を盗んで捕まり、臭い飯を食ったというほらまで吹いて、ない事実を盛んにずらりと並べた。

彼はこのように女に媚びながら、縁側から一番鶏の鳴き声を聞いて驚いた。夜明けまでには発つ支度ができていなくてはならない。彼は女の頬を手でこすってみて、ぱっと立ち上がり外に出る。

「俺ちょっと行って来るから、必ず待ってろよ。」

(7)クンシギが街に出る頃には、三日月は完全に沈んでいた。

向こう側に渡り、山のふもとのそば屋には未だ庭の灯りが明るい。まだ博打打ちたちが集まり、そばを食べているようだ。

彼は土手に回りながら、今頃妻が家に帰って、果たして寝ているかがとても気になった。どうかすればくり鉢がなくなったことが知られたかもしれない。自分が入れば、小言を言おうと待ち構えてはいまいか—

こうなればケスギとの約束を破るばかりか、まずいことになってしまう。

彼はひとりでにまた腹が立ってきた。女のくせに生意気に夫のことを待ち構えているだとか？ 夫がしたいようにしただけなのに、いつも何様のつもりだ——しかしこの拳が耳元を三、四発ばかり殴ればそれで済むじゃないか——

また勇気が出て来て、彼は自分の家のしおり戸に近づくとそっと押して入った。

月明かりがなくなったので、台所の方は真っ暗なこと、まるで暗闇だ。庭に敷き詰められた雪の反影があるのでそれでもまだいけると思った。

しかしまず土間の上に登って、戸に耳を傾けずにはいられなかった。

目張り<sup>12</sup>も揺れるほど深い寝息。口を開いて人の傍でいびきをかいていた妻を日ごろ責めたが、こんな時に恩恵にあずかるとは実に思いもよらなかった。あんな寝息なら手足を縛って行っても気付かないほど眠りこけているだろうから――

ようやく安心し、腰をかがめてから泥棒のようにつま先歩きで台所に入った。最初に暮らし始めるなら、ご飯は食べなければならぬので釜が必要だ。手探りで探して釜の蓋を片隅に取って置き、かまどに片脚を載せ、両手で釜のつばをしっかりと握りしめた。これで引っ張りさえすれば、ぐいと抜けるだろうからそう難しくないだろう。

考えてみれば、この釜は四年前に妻を迎える時、幸せの契りを交わした釜だった。いつだったか、村で買って担いで来る時は本当に嬉しかった。時が過ぎるほどに妻が何たるかを知らなかったのが今になってみると、なるほどすこぶる素晴らしい宝だ。この釜で二人ご飯を炊いて一生一緒に生きようと思うと、世の中がすべて自分たちのものようだった。

「釜、買って来たぞ。」

こう家に帰って、置くと、妻も走って出て来て荷をほどきながら、

「まあ、この釜きれいだわ！いくらしたんです？」

と喜んだ。

「店の野郎が一ウォン四十銭だというのを無理やりまけさせて、一ウォン三十銭で買って来たぜ。」と自分だから負けさせたんと言わんばかりに自慢すると、

「本当に安く買ったわ。でももっとまけさせたら良かったのに。」

そして妻は釜を叩いてみて、明かりに照らしてみたりした。それでも底に穴が開いているかもしれないので、水を注いでみて、

「あ、ほら。漏れてるわ、漏れてる。どうしましょう？」

「なに、どれ…」

彼は釜を持ち、目をまん丸くして見ながら、

「この釜め、漏れてるだと！」

と、しばらく探してみた後に、漏れているのではなく縁から水が溢れていることがわかった。

「それもわからないの。これは漏れてるのよ。表に水が流れてるじゃない――」

「なるほど、そうだな！」

二人でこう幸せに笑い、楽しんだその釜だった。

---

<sup>12</sup> 隙間風を防ぐために窓枠に張る障子紙

しかし、想像していた甘い夢は数か月で、ともすると飢え、ひどく苦労ばかりした。もはや当然、他の場所に移らなければならないだろう。

彼は少しもためらわずに釜をぐいっと取り、片隅に下ろしておいて、また次の物を探した。

(8)クンシギは暗い台所の真ん中に立ち、まるで何かに追われている人かのようにあたふたする。そうかといって何かを探すわけでもなく、取っておいた釜を掴むのでもない。何を持って行くべきか、実は持って行く器もなければ、思いつかなかったからだ。来るときはあんなにもいろいろと考えていたのに、実際いざ来てみると、まごついてしまう。

しばらくして、

(そうだ、こんなことじゃ駄目だ！)

彼は忘れていたことをやっと思い出し、台所に掛かった籠を取って持ち、探し回る。その中にはすり減って歪んださじが三本、長短の合わない箸が四膳あった。そのうちトギ(息子)が食べるさじ一つだけ残して、すべて掴んで懐にぐいっと差し込んだ。

そしてもっと持って行こうと思えば、事足りないわけではないが、器が気に入らない。例えば、お碗、ひさご、小皿—

部屋にはこれから二人でかぶって寝なければならない布団が一組ある。しかし今頃妻がくるまってもみくちやにしているだろうから、これは仕方がない。また下座の隅に四升ほど残った粟の袋もあったじゃないか—

しかし、これらは全部誤った方向へ導いてしまう考えだ。彼は少し不十分ではあるが、釜だけ持ち出して、そのまま影のように出てしまった。

彼の家はスオリ谷の尾にかかったはずれだった。両側の山に挟まり、小川のほとりに家があり、いつもうら寂しかった。村の方に用事でもあり、石が敷かれた小川の道をここから上り下りしようとする、少なからず大変だった。

しかしこれからはそんな苦労はもうしなくてもいいのだ。苦労とも別れるのだと思うと、愛おしくもある一方で切ないような気がしなくもない。

彼は住んでいた自身の家を何回か振り返って、そして酒屋にさっと走って行った。

部屋に灯りがまだ灯っていた。

クンシギはあわててしおり戸を開けて駆け込みながら、

「ああ、寒い！」

と、大きく身震いした。

「早くお入りになって。来ないかと思ったわ。」

ケスギはめんくらったような笑みを浮かべ、そしてとても喜んだ。おそらくその間、横にもならず、風呂敷に子どものおしめをまとめながら、髻まげを結び直しもし、出発する準備にそわそわしていたのだろう。

「来ないってなんで来ないんだ？」

「そうね。来なかったらただじゃ済まない。ひどい目にあわせてやるわ。」

と、その腕を掴んでつねると、

「あ、ああ、痛え！」

と、クンシギが騒いで飛びかかると、

「ねえ、そういえば荷物はどうするんです？」

「どうするって？」

「いや、これから包もうって言うんでしょう？」

と、何かしばらく心の中で考える。

「早く包んで、明るくなってくるから、すぐに発ちましょう。」

クンシギもそれに同意して女の言う通り荷物を高く括っておいた。荷物と言っても、釜、石臼、木の台、服の包み、それに酒代に受け取った米何杓、粟何杓か。

夜明けになればすぐ、担いで行きさえすれば良いほど荷物はとても簡単だった。もし朝になれば、まず酒屋の主人に発覚してから、村に噂が広がるだろう。そればかりか、妻が追いかけて来ればそれまで、恥をかくばかりではないか——

発つ支度ができる、彼は床に横たわって夜明けを待った。今からでも出発したいのはやまやまだが、山里で獣に出会えばお化けになってしまう。しかし酒屋の勘定は済んだというから、挨拶もせず夜明けまでにはこっそり逃げねばならないだろう。

彼は体をぶるぶる震わせながら、早く夜が明け始めなければ……そう思いながらいつの間にかうっかり寝入ってしまった。

(9)いつ頃になったのだろうか。

肩をそびやかし冷気が釜に漏れ入るように胸がどきどきして、はっと目覚めた。しかし実際はそうではなく、子どもがああんとむずがって、頭の上にしきりに這い上がって目が覚めたのかもしれない。

彼は面倒くさそうに手で子どもを押し戻し、また押し戻した。しかし三度目に押し戻そうと手が額の上に上がった時、実にあり得ないことに、背後の下座の方から、

「こっちに来い、お父ちゃんはここだよ。」

と耳慣れない声が聞こえるではないか——

しわがれて力強いその声——

クンシギは、これは夢ではないのかと思い、気を落ちつけて目を開けたり閉めたりした。そうかと言って体をびくっとさせるのでもなく、息遣いを荒くするわけでもなく、胸の内てただ心臓だけがどきんどきんと打つばかりだった。

いくら考えてもこれは夢ではないかと思った。暗い部屋、前に横たわったケスギ、ああんと泣く赤ん坊——

しわがれ声はまた聞こえる。

「こっちに來いよ、お父ちゃんはこっちだってば——」

子どもの父親なら、きっと見捨てた元の夫があわてて付いて来たに違いないだろう。そして妻の不貞の現場にかち合った夫の怒りなら、誰も彼も皆同じであろう。腹立ちまぎれに鎌でも持って突き刺せば、そのまま声も出ずに死ぬしかない。

確かにこれは夢でなければならぬはずだが、夢ではないのでクンシギは一気に汗が噴き出るほど、内心はもどかしかった。固まった背筋はそのままに、足の指一つぴくりともできないのが、本当に死ぬのかと思い、ほとんど生きる屍しかばねになった。

もちろんこうすべきかああすべきかと、しきりに知恵を絞ってもみる。そうして結局はケスギを起こせば、少しはよく転じるかと指でその腹をそとつづいてもみた。しかしケスギは目覚めるどころか彼の腰をもっとしっかりと抱きしめ、ぐっすり寝込んで何もわかっていない。

彼はさらにだらだらと脂汗をかいた。

夫はほずどすと背後から歩いて来るようで、子どもをさっと抱き上げている様子だ。

「こいつめ、なんでうるさくするんだ？」

こう子どもを咎めて、

「息子よ、さあ寝なさい！」

となだめながら、下座の方へまた降りて行った。

その態度やその言葉遣いは、とても心根が優しそうに見えた。しかしクンシギにはこのことがかえって肉を切るように耐えられないことだった。どうせ死ぬなら、早く殺してほしいというのがたった一つ残った願いかもしれない。

ケスギはいくらか後になって、のろのろとやっと体を起こした。

「早く行かなきゃ。」

と、両手の甲で細い目をこすりながら下座の方へ降りてみて、ひどく驚く。そして下を見ると口をぎゅっとなぐんで黙っているばかりだ。

この間に日はすっかりばあっと明るくなった。

奥の台所では釜をすすぐ音がやかましく聞こえて来る。

主人は咳をすると、ぎしぎしさせながら門を開く様子だった。

クンシギはこちらも死んだと同じ、あちらも死んだと同じと思った。耐えきれず自分も付いて起き上がり、しゃがみ込んで、どうなるのかまともやしばらく待った。そんな中、横目でじろっと窺うと、背の高い奴が机の脚に子どもを抱いて下座に座った。気性はそう荒くはないが、嫉妬心が少しあるようなその顔が優に人でも捕まえたようだ。

(10)「行こう——」

夫はこう催促しながら、すっと立ちあがった。まるで自分が主張して二人を連れて遠

くに旅立つようだ。赤ん坊をケスギに任せると、クンシギに向かって、

「あの、起きて、この荷物ちょっと担ぐの手伝ってください——」

と、手を借りる。

クンシギはしばらく面食らって、その顔をぼうっと眺めたが、言う通りにしないわけにもいかない。生かしておいてくれるだけでも幸いだと思い、もともとは自分が背負う荷物ではあるが、その背中に背負わせてやった。

釜、石臼、木の台、包みを一つに束ねたものなので、重さもかなり重いはずだ。しかし夫は少しも大変そうな素振りを見せるどころか、とても軽快な体でふらふらと外に向かって出る。

妻は夫の命令通り、赤ん坊はおくるみに包んで背におぶった。そして口の中で何やらぶつぶつ言っていると、自分も付いて出て行く。

クンシギは気の抜けた人のように立って、まったく訳がわからない。しばらくそうしてから一体どうなったのか、彼らの様子でも見ようと、彼もそろそろと後を付けた。

朝の空気は骨の先までずきずき痛むほどさらに厳しい。

風は地面の雪を溶かし、顔に吹き付け、また吹き付けた。

彼らは山裾の角地を曲がり込んで平らな丘の坂道の方へ、大股で降りる。

妻を前に立たせて、道を案内させる一方で、夫は後ろでつつ立っているクンシギを振り返りながら、

「なんでつつ立ってるんです。早く一緒に行きましょう。」

と、連れ立って行くことを親切に勧めた。

しかしクンシギは何も答えず、ただ呆然と立っているだけだ。

この時山裾の角の横道から拳をゆらしながら息せき切って走って来るのは、クンシギの妻だった。口は開いても、あまりにもあつけに取られて言葉が出て来なかった。顔は真っ赤になり、目に涙がにわかにあふれると、

「なんで人の釜を持って行くのよ？」

と、すぐに女に食ってかかる。

女はかんざしを挿したまげを引ったくられたせいで後ろに体がふらついた。

そして首だけをかろうじて回し、

「誰が持って行ったですって？」

と言いながら、

「じゃああの釜は誰のよ？」

「誰のか知らないわよ！ 持って来てくれたから持って行くのよ。」

と、クンシギの妻に劣らず殺気立って声を上げる。

村の人たちは寝ていた目をこすりながら、一人二人と見物に出て来る。やや離れて、互

いにくっ付いては離れて、

「あれはクンシギの家の釜なのか？」

「まさか人の釜を持って行こうっていうの……」

「持って来てくれたって言うんだから、クンシギが取って来たんでしょ。」

こうひそひそ話す——

「そうじゃない！ そうじゃないんだ！」

クンシギは妻を引き離させながら、両頬がかつかとほてった。しかし、妻は夫に片腕を引っ張られたままあがき、相変わらずはむかおうとする。そして首が裂けそうに、

「なんで人の釜を盗んで行くのよ、この泥棒女め——」

と、あがき続ける。

しかしながら、酒売りの夫婦はもう聞こえなくなったのか、一人は荷物を、一人は子どもを引っ担いだまま丘の方へ堂々と下って行きながら、一度振り返って見ることもない。

妻は怒りがこみ上げ、そのまま雪の上にぺたりとしゃがみ込み、なりふり構わず泣きわめく。

クンシギは見物人の方へ視線をちらつかせながら、苦虫を噛み潰すばかり——結局は両手で雪の上の妻を掴み起こしながら、ほとんど泣きべそをかきそうになった。

「違うんだよ、俺たちの釜じゃないってば、まったく——」

(1)



(2)



(3)



(4)





## 2) 「妻(안해)」

うちの妻は誰が見ても、きれいとは言わないだろう。本当に女に狂った奴がいれば知らないが、俺も日ごろ一緒に過ごしてはするが、大目に見たってこれっぽっちもきれいじゃない。けれども、女は顔がきれいなのがなんぼのものか。くそったれ。牡牛みたいな息子さえどんどん生んでくれりゃあ、それで充分だろう。まったく俺みたいな奴は、老いて子どもさえもいなければ、きっと餓え死にするしかない。持ってる土地もなく、体が動かさなくて働けない、こんなのをどこのバカな奴が、ただで食わせてくれるかってんだ。だから俺が言いたいのは、どうせなら若いうちになるべくたくさん子どもでも生んでおこうということだ。

そして、母ちゃんの顔が駄目だといって、子どもの顔まで汚いということはないだろう。ああ、まさにうちのトルトリ(お利巧ちゃん)を見てもわかるが、あの母ちゃんはついたばかりの餅のようでも、どんなに賢くて顔立ちが整ったことだろうか。たとえ、食った後でももっとくれと執念深くねだりはしようとも。まったくこいつこそ、俺にとっては父さん

よりもじいさんよりも言い尽くせないほどの、この上ない宝だ。

あいつが俺にでかい面をすることになったのも、結局こいつを生んだからだ。今まではあんな醜い顔で、これっぽっちだって逆らえただろうか。よく言うことに、蓼食う虫も好き好きだという。けれどもいくら腐った目玉でも、この顔だけはどうしようもないのだ。

額が広くて眉間が離れていれば、賢そうだというじゃないか。それは良いことだが、かわいらしさがなく、この調子で丸く平たく下がったあごに不格好にぐっと突き出したのが口だ。厚くはあるが上向きになっている唇、話そうとすればそうきれいでもない上の歯をむやみにさらけ出す。それはそうだとしめて、真ん中にぶら下がった鼻でもはっきりとしていたなら、いくらかまされよう。初対面で目に付くのがその鼻なのに、こう言うといつの悪口になるが、いくら大目に見ようとしても、遠い山を眺める豚の鼻が思わず思い浮かんでしまう。

こんなざまだから、夜になれば俺の顔色をじろじろとうかがうではないか。今日はいじめられるのではないかとひそかに心配するのであろう。これがかわいそうで、疲れた体でもたいてい俺が先に話しかける。一日何してたんだとか、しおり戸をちょっと直しておけといったがどうなってるのかとか、あるいは今晚はどうしたことか鼻がずっと良く見えるだとか、そう言うといつがすぐにつこりとして、さっと俺の傍に来て座っては、肩にもたれてすりすりとしりすり付ける。そして鼻がきれいに見えるって本当にそうなのか、と躍起になってしきりに聞く。自分としても信じ難いその事実を、一時の慰めではあってももう一度聞いてみようという心情なのだろう。その胸の内を知ってか、本当に鼻筋が通ったとすれば、あいつの答えが、便所に行く度に鼻筋を引っ張り出していたので、もしかしたら鼻が高くなったのかもしれないと言って、そうしてとても喜ぶのだ。

しかし、ある時は半日畝の間で、体がへばってしまう。もちろん一言掛ける間もなく部屋の床にそのまま横になってしまうのであって、そうしたらあいつは自分の顔のせいでそうするのかと思い、片隅に行ってしょんぼりして座り込んだ。顔を横に向けて顎をにゅっと突き出しているのを見れば、きっと自分としては横顔でも一度見てくれと言いたいのだろう。罰当たりな奴だ。横顔だと言って、何ちよっとましたとでも思ってるのか……。

こんな奴がトルトリを生んでからは突然堂々とするようになった。俺が入って行ってもお前なんていつ会ったのか、というふうで見向きもしない。見下げるかのように目を下に向け、子どもに乳ばかり飲ませるのだ。俺がちょっと子どもの頭でも撫でながら、

「こいつ、一日寝てばかりいるのか？」

「そっとしてて、なんで起こそうとするのよ。」と、容赦なく俺の手の甲を拳で叩く。俺は

はじめどうしたことか訳が分からず、ぼうっと天井ばかりしばらく眺めた。俺の子どもを俺が触るのに、拳で叩くとはどうしたものか。しかしよく考えてみれば、少しも俺が悔しがることはない。あいつが俺に偉そうにする権利があることが次第にわかった。そうしてその時から俺が「このあま」と言えば、あっちは「こいつ」とはむかうことが無言のうちに決められた。

村では人の気も知らずに、俺たちにならず者というあだ名が付けられた。しょっちゅう互いに喧嘩しようとならみつけているからだ。確かに最近は一日でも静かな日があるだろうかというほど、会いさえすれば、この野郎、このあま、とまず食ってかかるのが常だ。他の人々は夜に会えば、

「おい、飯は食ったか？」

「まだです、あなたが来たら一緒に食べようと…」と立ち上がって喜ぶのだろうが、俺たちはそうではない。誰がそんな猫なで声で寄り添うだろうか。部屋にぱっと入るやいなや、まず平たい奴の尻を足で蹴っ飛ばす。

「このあま！ 起きて、飯の支度しろ。」

「こいつ何様さ、足を折ってやろうか。」と奴がこっちを向くと、

「木を売った金はどうした。また酒飲みやがっただろ？」こう、がんがんと怒鳴りつけた。事実俺たちはこうでこそ、情が包みからこぼれ落ちて、また女と一緒に暮らす楽しみがあるのだ。孫のような顔をして、かみさんよ、どうしたと甘えながら寄り添うのは、気持ち悪くて見てられないではないか。女と暮らすことの良さはののしって殴って蹴って、すべてこんな面白みであって、そう思ってみれば貧しい生活でやけくそになった奴の言うことなのかもしれない。しかし誰も皆同じことだろう。時々息苦しく、はらわたが煮えくり返ることがあるだろう。百姓をしても利益もなく、借金に追われ、その上家に帰れば子どもがわんわん泣き、妻は服がなく震えている時に、尋常でいられようか。なんだかんだと皮肉を言って、女の頭をがっつと掴んで振り回しながら一騒ぎしてしばらく暴れたら、背筋に汗がつうつと流れて、一息つけばまあまあ気が和らぐのであった。あとは奴を元に押しつけて、煙草一本だけ吸いくわえれば良いのだ。

ここに女が有難いものであって、俺がまた奴を忘れられない訳があるのだ。そうでなければ、あれを女と認め、慰めてやって、その醜い鼻をきれいだと時々おだててやる意味があるのか。しかし女が座ってすすり泣くの見れば、これはあまり面白みがない。あれが腕力であれ口であれ、俺に食ってかかるなんてとんでもない。喧嘩の始まりは誰が先にふっかけようが、いつでもひどい目に遭って退くのは女の方だった。

「こっちに来て横になれ。」

「やめて、あんたこそ、ここに来て寝ときな。」と女が殺気立って、振り返りもせず知らぬふりをする。しかし三、四回降りて来いと勧めると、その後おのずと俺の横にそうっと這って入り込む。そして涙を流す顔を、にこりと横眼で見せるではないか。だからあいつからすれば、叩き叩かれ、知らぬふりをするために俺と住むのかも知れない。

しかし、俺たちが仇のようにいつも喧嘩しているからといって、情がないかと言えば決してそうではない。話が出たのでついでに言うが、夫婦の愛情で言うなら俺たちほどもち米のようにねばっこいものもないだろう。憎ければ憎いほど、喧嘩するほど、少しも離れたくないほどにますます情が湧くのだ。夫婦の情とはこんなものか知らないが、いずれにせよ不可解なヒルのような情だ。俺だけでなくあいつもひどくぶん殴られた後に、一緒に床に入れば

「あたしの顔が、それでもそんなに醜くはないでしょ？」と、本当に自慢げに、やいやいと食ってかかる。そうすれば俺はこんな時、何と答えれば良いのか。あまりにあきれて、天井を見上げながらふんと言い放ってしまう。

「てめえ！　それが顔か？」

「顔じゃなけりゃ、他に何だって言うのさ。」

「俺だから、お前みたいな奴と連れ添ってるんだ。誰が相手してくれるんだ、その面に？」

「何さ、あんたの顔が顔だって言うの？　いが栗みたいな顔して。まったくあたしだから一緒になったんでしょ。」

こうなるとまた起き上がり、一度汗を流した後にまた横になるしかない。俺の顔がいが栗みたいだなんて、これでもうちのおふくろが俺を生んだ時、将来ちよつとした土地を所有する子だと、喜んでいたのがこの顔なのに。けれど起き上がって身振り手振りをするにも、怒る気が失せて、だいたいはそのままだり過ごす。

「そうだ、俺がお前をかわいがってやるから、子どもでも産んでおけ。」

「食わせもできないのを、いっぱい生ませて、飢え死にさせる気なのかい？」

「このあま！　物乞いでもして食わせたらどうだ？」と大声を上げたものの、確かに後ろめたさを感じる。こつこつと貯めておいて食わせもできなければ、こりゃどうしたものか。捨ててもできず死なすこともできず、死体の山ができたのを見れば、やはりあいつが俺よりずっと思慮深いってことがわかるだろう。もちろん、十里ほども離れた眉間を見ただけでも、俺とは程度が違うのだが……

俺たちのこの頃食べるものは、俺が木こりをして稼いだものだ。夏なら手間仕事でもす

るが、雪がこんこんと積もったのに、氷でも割って食うってのか。そりゃ、山里ではどんな仕事でも仕方あるまいが、ある日は山に行って木を切って、次の日は村に行って売る。俺だから背負子を二つ背負う筋力があるだろうが。いっぱいの木を背負子二つを、一人で順番にこっちに渡して休み、あっちに渡して休みながら、長い長い三十里の道を半日かけて運ぶのだ。そうでなければ一背負いずつ売ってはいは、どうして食わすことができるだろうか。よくて二背負いで八十銭、運が悪ければ六十銭から六十五銭、それで粟、豆、わかめか何かを買って来るのだ。粥を炊けばちょっと増えるだろうが、俺たちはそんな汚い真似はしない。食べられなくてお腹がぺこぺこになったとしても当然、炊いたご飯だ。トルトリは四歳の子どもだから小さい茶碗、俺は父親だから一杯にさらに半分を食って、ところがあいつだけは特別に二杯を平らげるではないか。その上、俺より先に残らず平らげては、俺の茶碗の飯を一すくいすくって食べる癖がある。女だから一安心していたのに、こいつは飯の虫ではなからうかと、ある時胸がひやりとするほど恐ろしく感じた。器量の良くない者が量くらい少なめにすりゃ良いのに、お前はなんで飯をこんなに食うんだと言っただけで目を見開くと、奴の答えは、子どもを生んだからよ、あんたも子ども生んでみな、とつんとすねる。おいおい、もういいから食え。後で飯代はその腹に付くんだから。ある時は、俺が少し減らしてでも、そのままあげてしまう。まったくひどい女だ、それにしてもあんまり食べ過ぎる。

しかし、あいつは大した才能もないのにやり手で、俺よりははるかに腹黒い。こんな馬鹿らしい百姓の仕事をしたって何になるのか、水商売でもしよう、なるほど俺の頭では思いもつかなかったことだが、とても立派な考えだ。損をする百姓の仕事よりは、白いご飯に、肉、服を思うままに着て…ちょっと贅沢だろうか。けれども、あいつの顔をじっと見ていると、その気分もしぼんでしまう。酒売りの女のところに酒を飲みに来るのは、女の顔を見ようというものなのに、どこのおかしい奴がああ面にしびれるものか。考えてみれば、本当に悔しい。あいつがもう少し利口だったなら、他に手があっただろうに。ぽかんと見つめてにがにがしように舌を鳴らすと、あいつはそれに感づいたのか、

「酒売りの女が顔だけきれいなら上手くいくわけじゃないのよ、顔はいまいちでもちゃんと手立てがなけりゃー」

「それじゃ、お前はその方法があるのか？」

「もちろんよ、やってできないことなんてないわ。」

あいつがこうもっともらしく大言壮語するではないか。酒売りに出て、食べたい飯を思う存分食べてみようというのが本心だろう。何度聞いても自分が必ずできるというので、

まったくそれじゃあ一度やってみよう。資金がかかるのでもなし、パンソリの歌でもいくつかきちんと教えて、連れていけば済むんだから。

俺が夜に家に帰ってくれば、あいつを前に座らせてパンソリを教えよう。まず俺が膝で調子を合わせながら、アリラン節を一度歌おう。アリラン、アリラン、アラリヨ、さらば、春川、鳳儀山。新湍江の船に乗ればお別れだ。山里の女なら江原道のアリランくらいは上手いだろうに、あいつはそれも知らない。だから簡単なアリランから始めるしかない。すると、あいつは膝をかかえて座り、両手で尻を打って真似る。喉から陶器の割れるような声が出るので、その後で良い声がある程度出るようになれば歌は上手くなるだろうが、調子がぴったり合わなけりゃならないのに、これが困ったもんだ。俺は歌を教えるのに、この出来の悪い奴は、まるで小説を棒読みしているようで、こりゃどうしたものか。こいつと一緒に練習したら鶏が鳴き、時には日も昇る時もある。あいつがあまりにもできないから手本として俺だけやって、またやって、またやってみると、あいつに酒売りを教えるというのは、逆に俺の方が習ってるじゃないか。くそつたれ、自分でも手で覆ってあくびをひっきりなしにして、眠くてたまらないのだろう。しかし、俺が先に寝ようというまでは、おそらく自分からはどうしても眠いとは言えないのだ。最初に酒売りに出ようと言い出したのは誰だ。こう考えれば、かっとなりがこみ上げてきて、つい手が出る。

「このあま！ しっかりしろ、俺ばっかりずっとやれってか？」

「こいつ…腕でも折ってやるぞ。」

「これをちゃんと習えば、お前は上手くできるんだ、このあま！ 俺は何になるっていうんだ？」

今度は指でおでこをぐっと押して、後ろに押し付ける。いつもならあいつが殺気立って、向こうに逃げ出すはずだ。自分に非があるから、また立ち上がって話し掛けてくれるのを待っているのではないか。哀れなことだ。できるかできないかも疑問だが、互いにあくびばかり出て、どうせ乗りかかった舟だからとやめることもできず、えいっ、こんちくしょう。お前も俺もなんとかしなけりゃこれで終わりになるかと、必死になるのだ。そして夜の山河が響くほどぎゃあぎゃああと声を高らかに、あいつとまたフン打令<sup>タリョン</sup><sup>13</sup>を歌う。

それでも一つ感心するのは、あいつに誠意はあるということだ。確かにそれさえもなければ、酒売りどころか、油かすだって見込みはないのだが。昼間でも暇さえあれば、あいつ一人で歌を練習するのだ。洗濯の時なら、洗濯棒で調子を合わせて二八青<sup>イバルチョンチョン</sup>春節を歌う。

<sup>13</sup> 節の終わりごとにフンという合いの手を入れて歌う民謡

あるいは部屋の片隅に座り込み、靴下を縫いながら肩で調子を合わせつつパンソリを歌う。歌一拍に針穴一つずつなので、靴下を片方繕うなら十日ほどもかかる。しかし、まったく靴下で食べていくというのか、歌だけしっかり習え。あいつも俺と同じくらい白いご飯に肉が早く食べたくてたまらないのか、ある時は外の土手を通ると、便所の中から鼻歌を歌っている時もある。しかし、もうパンソリに合いの手くらいはなんとか習ったんだから、次のはいつ習うっていうんだ、この馬鹿が、まったく。

その上、あいつが生意気にも俺に新式の唱歌を教えてくれという。酒売りは旧式の歌も上手くなけりゃならないが、はじめに流行りの唱歌を知ってこそ上手いくんだ、という。そう簡単に言うが、俺がどの流行りの唱歌を知ってるってんだ、土を耕して食ってる奴が。俺はそんなのは知らねえ、と啞然としていると、数日後あいつが流行りの唱歌一つを習って来た。火鉢を抱えて座り、そのへりをしきりに叩いて、そら見ろというように自慢げではないか。咲いたね、咲いたね、蓮の花が咲いたね、咲いたねという、見る間に縮んだね。一体これをどこで習ったのか、こいつまったく俺よりやり手だな、と俺はずいぶん感心した。ところが、聞いてみるとあいつがいつの間にか夜学に行って習ったというじゃないか。夜学といっても山の裏にある小さな穴蔵だが、百姓の子どもに一冬の間、ハングルを教えるのだ。唱歌を歌う頃に、あいつが寒さも知らずにそこを訪ねて行く。子どもを背負って扉の外に立ち、耳を傾け盗み聞きしながら、あいつもひっそりと真似するのだ。そうして家に帰ってからは、見栄を張って大げさに歌う。新式の唱歌は、数日習えば上手くなるというのだ。

しかし、いくら考えてみてもあいつの面だけは心配だ。歌はだんだんとまずまずになってきているが、こいつの顔はいくら見ても、見ても、全く駄目だ。くそ女め、もう少し見栄え良く生まれれば、こういう時に大儲けできるものを。時々怒りがこみ上げてくると、何も言わずにあいつの腹を一二度殴らずにはいられない。訳がわからず、あいつも目をむき、訳がわからず見つめるのだ。くそつたれ。その面をして俺のところへ嫁に来るなんて、ずうずうしい。しかし、あいつも言いほしませんが、自分の顔のせいで時々気を揉むのだろう、ボロボロの手鏡を持って座り、あちらこちらじっと眺めては、目は変わらないんだから、そんなに見たってきれいに見えるわけがなかろう。だから、五臓が腐るようなため息が続げまに出、がっかりしてしまうのだ。けれども、幸い俺が部屋にいと振り返って、

「ねえ、あたしの顔、最近少しましになってない？」

「うん、ちょっとましになったな。」

「本当のこと、言ってよ一。」と、あいつが腕をつねって、ぐっと飛びかかってくる。あいつは図々しいので、俺くらいは良いように答えてくれるだろう、と信じて尋ねるのだろう。本当に見た通りに言う人なら、怖くて尋ねることもできまい。わざと、きれいになったと俺もしらばくれば、あいつは喜んで、最近あか取り粉でしょっちゅう顔を洗っているの、少しはきれいになったと言って、酒売りはそんなにまできれいでなくても良いと、またくどくどと説明を並べる。くそ女め。女は顔が醜いという言葉が、刃物で突き刺すよりもっと怖いようだ。悪口を言って犬を掴むようにむやみに叩いても、少し後にはきよんとして俺の前に入り込むような奴だ。けれども、どうしたとか、自分の顔の欠点を言われれば、三日も四日もあいつは俺をそれとなく避け、何気なく困らせようとする。けしからん奴め。醜いのがそんなにうんざりするなら、最初から布でもかぶって歩けば良いんだ。あいつはいけずうずしくて、もう少しきれいだったなら媚びたりせずに、お金のあつ奴のところに行っただろう。女は顔がきれいなら、その顔で自分を売ろうとするからだ。そう思うと、あいつの面が汚いのは、俺にとっては不幸中の幸いというしかないだろう。

女はおそらく夫を騙すのが、楽しくて仕方ないようだ。あいつが酒売りの真似をする手段があるとやたらに言い張るのも、あいつの言動を信じてのことかもしれない。朝早く大便をしようとすると、どこかで唱歌を歌っている。むしろの間隙から覗き見ると、あいつが飯を炊きながら練習しているじゃないか。吹雪はしんしんと音を立てているのに、かまどにしゃがみ込んで火掻き棒で釜の蓋をこんこんと叩く。そしてそれに合わせて、新式の唱歌をみすぼらしく歌うのだ。そのうちご飯がぐらぐらと炊きあがると、釜の蓋をずらしておいて、また始める。若くても翁草、老いても翁草、あははは、滑稽なことだ。曲がった翁草。ばかな奴。唱歌は本当に好きなのだろう。臼搗き歌を熱心に勉強しておけというのに、それはせずに。まったく、なんでもおおいにするのは良いことだ。しかし、今度はチョコゴリのおくみ衿がごそごそすると、あ、どうしたとかキセルが出てくるではないか。周囲をちらちらとまたうかがって誰もいないので、たき口に入れて一服ふうっと吸うのだ。そして激しくくしゃみを立て続けにして、鼻をかんでこのざまだ。一昨日もばれてひどい目にあつたのに、あいつはまた俺の煙草を盗んで持って行ったのだ。金のかからないパンソリでも習ったんだろう、バカめ、大切な煙草を盗みやがって。すぐに飛び出して追いかけてしようとしたが、最近トルトリが風邪を引いているので飛び出せなかったのだ。あいつが昼夜負ぶって夜学などに連れまわしたので、しまいにああなってしまったのだ。バカ女め、人の息子が大切なもの知らずに。酒売りをしながら、悪い癖がついてしまうだろう。クソ女が歌う歌で酒売りをしようとするなら、歌はもちろん、煙草も酒も覚えて、人を操るこ

とも覚え、こうでなければ務まらないとか。これが全部、この前村に入ってきた酒売りから聞いた台詞なのだ。それであいつも練習を兼ねて、あれもこれも皆一通りやってみたくてやきもきしていたのだ。臼搗き歌一つろくにできない奴が、パンソリはそれでできるとでも思っていたのか！

これに気付いてあいつをたぶらかした奴が、この村の下の方に住むムンテの野郎だ。あいつも汚い奴だ。

俺の妻のこの面に体が熱くなるなら、こいつもその程度のバカな奴だろう。一体どんなに女がほしかったら、それに手を出そうっていうのか、バカな奴め。野郎が来て、年末だから酒を飲みに行こうとあいつを誘い込んだのだ。しばらくしたら俺が帰るからだめだと言っても、来る前にちょっとだけ、と手を引っ張った。酒売りに出るなら、まず酒を売る経験をしなけりゃならないからというので、あいつはその気になって軽率にさっさと付いて行ったのだろう。家を潰す女め。夫が木を売りに行き遅くなれば、ご飯の準備をして待つのが正しいじゃないか。人が夜道を三十里もあえぎあえぎ歩いてくるのに。雪がしんと積もり、足首を切るような冷たさに痺れて。村に入ってきた時には、さすがに倒れそうなほど空腹感を覚えていた。早く帰ってご飯一杯かっ食らって、あいつを座らせてまたパンソリを教えなけりゃ。こんなことを思いながら酒屋の横を通り過ぎると、思いもよらず驚いたことには、その離れの部屋であいつの高笑いが聞こえるのだ。素早く近づき戸の隙間から覗いてみると、あっ、このくそ女がムンテと酒を飲んでいるのだ。

あまりにもばかばかしくて様子だけ見ていたが、これ以上は耐えられない。背負子を脱ぎ捨て、戸をさっと開けると、まず野郎から床に投げ飛ばした。もちろんお膳は足で蹴ったから壁にぶつかって壊れた。次はあいつのかんざしの辺りをぐいぐい引きずって外に連れ出した。酒に酔った女を、正気にさせるために、たっぷりひどい目にあわせなけりゃならないと、雪に押し込んだ。そして下敷きにして、くそ女の背筋を拳でぶん殴った。殴れば殴るほど次第に雪の中に入るばかり、強く抵抗するには酔い過ぎた。殴るのも、あいつがはむかってこそ楽しみがあるので、これではあんまり味気ない。あいつはそのまま放っておいて部屋に入って野郎を探すと、この乞食野郎が子ネズミのようにどこかへすでに逃げ出した後ではないか。まったく、こんな奴らのせいでこの村は滅びてしまう。人の女と遊んだなら、夫の前に出てきて頭を割られるのが当然だろう。逃げるなんて、ならず者もいいところだ。仕方なくぐったりへたばったくそ女を背に負ぶって、よたよた家に帰ろうとすると死にそうだ。天気はひどく冷たく、ずきずき痛むほど腹は減り、少し怒ろうとしてもこれ以上怒る気力がない。その上うちの家の前の坂道を上る途中で、こけて膝をひど

く擦りむいた。そして家に入ると誰もいない部屋には、トルトリが一人母親を呼んで泣いて大騒ぎだ。ふしだらな女め。人の子をこんなふうに育てて、どういうつもりだ。こいつのあり様を見ると、すでに見込みはない。こいつと酒売りに出たところで、俺は片隅に寝かせたまま、他の男を引き連れて逃げる奴だ。お前は酒売りで金儲けの考えもせず、ただ家で黙って座っているのが良い。おとなしく旦那が稼いできた分でやりくりし、子どもでもたくさん産め。欲張らず、体格の良い息子だけ十五人なら十分だ。待てよ、一人が一年に稲十俵ずつでも稼ぐなら、十五俵だから百五十俵。一俵が最低十ウォン一枚ずつでももらうなら、皆で千五百ウォンだろう。千五百ウォン、千五百ウォン、本当に千五百ウォンなら、なんてこった、こりゃ多すぎるな。そうとは知らず、こいつが腹の中に千五百ウォンを持ってるんだから、どんなに考えてみても俺よりはましじゃねえか。

朴 鍾祐 (神戸大学国際教育総合センター／大学院人文学研究科)

石塚由佳 (韓国群山大学非常勤講師)